View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

コーパスに基づく字順転倒漢語の網羅的把握の試み

著者	間淵 洋子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	3
ページ	452-462
発行年	2018
URL	http://doi.org/10.15084/00001679

コーパスに基づく字順転倒漢語の網羅的把握の試み

間淵 洋子（国立国語研究所 言語変化研究領域）†

A Corpus Based Study of Sino-Japanese Words with the Reversed Order of Characters in Modern Japanese

MABUCHI, Yoko (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

近代に特徴的に多く見られる「華麗」と「麗華」のように字順が逆転した漢語対を，近代語のコーパスを用いて網羅的に抽出し，対となる各語の使用頻度が 10 以上の約 400 の漢語対を選定した。これら約 400 語について，現代語においても対をなして残っているか，どちらかが淘汰され 1 語に集約されたか，あるいは両語共に淘汰されたかといった，使用状況の変化を調査し，対となる各語間の意味的関係性や近代における使用頻度と，現代での使用状況とに関わりがあるかを検討した。その結果，両語の意味関係において異なりがあるものは両語が併存する傾向，また，使用頻度の高い語形は現代語に残存する傾向を見出すことができた。一方で，辞書的意味においてほぼ同義と判断される漢語対においても，多くの漢語対で両語が残存していた。これらの対は，①一方が極めて限定的に現代語コーパスで用いられているだけで，実際には他方の優勢な語形にほぼ統一化されており，語の淘汰の過渡期と見られるものや，②辞書における語義には大差が認められないものの，一方の用法が限定・固定化されており（連語，文法機能，特殊な意味・文脈等），用法の分化が明らかなために併存しているものが多く，近代漢語の変化の方向性は，１義１語を志向して語が淘汰されていると位置づけることができた。

１．はじめに

近年，様々な時代の日本語を対象とした大規模なデータベースが整備されつつある。特に，語彙を対象とした研究には欠かせない単語情報の付与されたコーパスによって，これまでは難しかった，日本語の語彙の全体像を実証的に捉えることが可能になり，これらを用いた通時的な語彙研究も行われるようになっている（田中 2016 など）。

発表者はこれまで，これらの言語資源を活用することで，近代と現代との間に見られる漢語の差異の実態や変化について分析・検討を行ってきた（間淵 2016a，間淵 2016b，間淵 2017a，間淵 2017b，間淵 2018）。これらの研究は，これまで多く指摘されてきた近代漢語の特異性（池上 1984，武部 1981，田島 1998a，今野 2012 など）について，大規模データを活かした計量的手法により大局的な観点からその実態を見渡し，変化の方向性とその背景を明らかにすることを目的に行ってきたものである。その結果が示唆するのは，近代漢語の語彙・表記・語法に見られる変化は，いずれも多様性が次第に淘汰され画一化されるという方向性を持っており，その背景原理が「言語運用の合理化」「語と意味の１対１対応」にある，ということであった。

本研究では，これらの変化の方向性と背景原理を裏打ちすると思われる，さらなる事象の一つとして，「華麗」と「麗華」，「遊戯」と「戯遊」のように，字順が逆転した 2 字漢語対（以下「字順転倒漢語」と呼ぶ）を取り上げ，コーパスを用いて実在するペアの抽

† mabuchi@ninjal.ac.jp

出と，出現実態を明らかにする。これらの語については，鈴木(1979, 1986)，田島(1998b, 1998c)等，多くの語を取り上げた研究がなされているが，その結論は，①近代初期に多くの字順転倒漢語が認められること，②同義・同用法の漢語対はどちらかの語が衰退・淘汰の傾向にあること，③後年（現代）まで併用される対は，意味や位相の分化が起きて使い分けがされていることなどである。ここでは，この指摘について計量的に実証することを目指すとともに，近代における使用実態の変遷にも着目し，これまで発表者が明らかにしてきた，表記や語法の画一化の様相や，特に画一化が進行する時期などと共通点が見られるかを観察する。

２．研究方法

２.１　コーパス

本研究では，近代における字順転倒漢語の実態をできる限り網羅的に捉え，また，それらが現代語においてどのように用いられているか把握するために，近代語と現代語のコーパスを用いた調査を行う。両時代のコーパスにおける出現状況を比較することで，字順転倒漢語の通時的な変化を見出すことができるはずである。対象とするコーパスの概要を表１に示す。

表１　調査対象コーパスの語彙量

時代	資料	出版年	語数（万）
近代	明六雑誌	1874-5	18
	国民之友	1887-8	101
	太陽	1895	202
		1901	197
		1909	187
		1917	180
		1925	203
	女学雑誌	189-45	59
	女学世界	1909	52
	婦人倶楽部	1925	54
	全体	1874-1925	1,253
現代	BCCWJ(出版 SC)	2001,2005	1,234

近代語のコーパスとしては，『日本語歴史コーパス　明治・大正時代編 I 雑誌（以下，「CHJ 明治大正雑誌」または「CHJ」と略記）』（収録語数約 1,253 万語，自立語数約 754 万語）を用いる。

これと対照する現代語のコーパスとしては，『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下，「BCCWJ」と表記）』の出版サブコーパス（以下，「SC」と表記）のうち 2001 年，2005 年の発行分の可変長サンプルを用いる（記号等を除く収録語数約 1,234 万語，助詞・助動詞を除く自立語数約 751 万語）。BCCWJ には，出版 SC のほかに，現代における言葉の流通実態を捉えるのに適した図書館 SC，個別の研究目的に沿うデータを集めた特定目的 SC があるが，本研究では，比較する近代のコーパスが雑誌のみであるため，逐次性の観点から共通性の高い資料として，雑誌や新聞を含む出版 SC を対象とする。出版 SC より 2001 年分と 2005 年分の２カ年のみを用いたのは，近代語コーパスと語数を概ね同様になるよう

に調整するためである。

２.２　調査対象語の抽出

近代で使用の見られる字順転倒漢語対を，以下の手順で抽出した。

1) 「CHJ 明治大正雑誌」「BCCWJ」から網羅的に 2 字漢語を抽出し，両コーパスにおけるすべての 2 字漢語の語彙表を作成（間淵 2017b を参照）
2) 「CHJ 明治大正雑誌」に出現するすべての漢語（＝近代漢語）に対する字順転倒文字列をエクセルの文字列操作関数等により作成
   例 : 漢語 A「漢語」→「=right(対象語のセル)&left(対象語のセル)」→転倒文字列 B「語漢」
3) 近代漢語の語彙表（頻度降順のもの）に，手順 2 で作成した転倒文字列 B が含まれるかをエクセルの MATCH 関数等で評価し，字順転倒漢語対を抽出
   例：「=match(転倒文字列セル,近代漢語の列範囲,0)
   →戻り値が「#N/A」(該当なし)のものは，字順転倒漢語対ではない
4) 字順転倒漢語対の重複（語 A-語 B の対と語 B-語 A の対）を解消
   例：=if(手順 3 の戻り値-ROW()>0,true,false)
   →戻り値 true のみを残す。近代で優勢（より高頻度）の語 A と劣勢（より低頻度）の語 B の字順転倒漢語対ができる。

上記手順により得られた，近代に見られる字順転倒漢語対は，2,239 対であった。このうち，両語の使用頻度が 10 以上のものを今回の分析対象とし，粗頻度 10 未満の語を含む対を除外した。さらに，「規定（キテイ）」と「定規（ジョウギ）」のように，字順転倒により漢字音の読みが異なるものについても対象外とした。これにより，分析対象として残ったのは，395 対 790 語となった。

２.３　分析の観点

先行研究で用いられる分析のための枠組みはおよそ以下 4 点にまとめられる。

1) 意味　対となる語同士の意味の重なり。同義か，類義か，異義か等。
2) 語法　各語の品詞的用法。名詞か，動詞か，形容詞か，副詞か。動詞の場合，自動詞か他動詞か等。
3) 語構成　各語を構成する漢字同士の関係。同義・類義または対義の字の並立関係か，述語－目的語，修飾－被修飾といった文法的関係か等。
4) 使用頻度　各語の頻度と勢力関係。いずれも低頻度・高頻度か，頻度に偏りがあるか等。

本研究では，近現代における漢語語彙の変化の把握を主たる研究目的とするため，近代で特異に多く存在した字順転倒漢語対が現代では減少した，という語彙変化との相関において，より重要な観点と見られる 1)意味と 4)使用頻度を中心に調査分析を行う。これら２項が，近代と現代における使用頻度を比較し得られる字順転倒漢語対の変化パターン（両語残存，両語消失，１語残存１語消失等）に，どのように関連するかを検討していくこととする。

３　調査結果

３．１　近現代間に見る使用状況の変化

まず，字順転倒漢語対が近代から現代にかけてどのように変化したか，あるいはしなかったかを把握するために，各語の使用状況（使用の有無）により以下の通り 4 分類した。

AB 併存：近代優勢漢語 A，近代劣勢漢語 B 共に，現代でも一定の（2 例以上）使用が認められる
A 残存 B 消失：近代優勢漢語 A のみ，現代での使用が認められる
B 残存 A 消失：近代劣勢漢語 B のみ，現代での使用が認められる
AB 消失：近代優勢漢語 A，近代劣勢漢語 B 共に，現代では（ほぼ）使用が認められない

分類結果を表 2，図 1 に示す。

表 2　現代での使用状況に基づく分類

分類	ペア数	字順転倒漢字対の例（A 粗頻度上位 25 対）
AB 併存	207	政治/治政,社会/会社,国民/民国,国家/家国,事実/実事,人民/民人,外国/国外,議会/会議,多数/数多,法律/律法,文明/明文,女子/子女,平和/和平,同一/一同,議論/論議,権利/利権,感情/情感,科学/学科,中心/心中,統一/一統,運命/命運,習慣/慣習,便利/利便,決議/議決,少年/年少
A 残存 B 消失	135	主人/人主,旅行/行旅,制限/限制,範囲/囲範,生存/存生,簡単/単簡,平生/生平,人士/士人,古今/今古,往来/来往,長官/官長,気風/風気,英仏/仏英,富豪/豪富,抵抗/抗抵,制裁/裁制,善良/良善,野蛮/蛮野,支度/度支,権威/威権,理事/事理,結論/論結,風習/習風,良好/好良,風流/流風
B 残存 A 消失	23	売淫/淫売,人才/才人,退隠/隠退,著大/大著,国中/中国,上進/進上,桂月/月桂,懐抱/抱懐,威武/武威,知了/了知,人前/前人,狂熱/熱狂,書信/信書,政法/法政,航通/通航,天則/則天,愛他/他愛,編中/中編,林学/学林,皇上/上皇,風通/通風,稿本/本稿,険峻/峻険
AB 消失	30	英独/独英,露仏/仏露,属僚/僚属,学政/政学,振作/作振,米独/独米,論定/定論,明月/月明,精励/励精,差等/等差,想美/美想,郡市/市郡,治平/平治,婢僕/僕婢,国君/君国,才学/学才,慈仁/仁慈,深甚/甚深,同公/公同,容儀/儀容,厭倦/倦厭,衆多/多衆,軍中/中軍,火熱/熱火,省減/減省

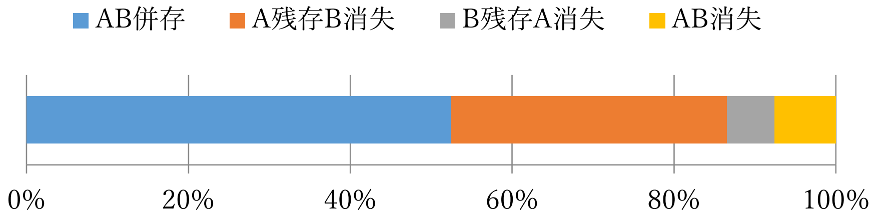

図 1　字順転倒漢字対の現代での使用状況割合

近代で見られた字順転倒漢字対は，半数以上が現代でも残存しているが，40%程度の対で片方の語が淘汰されており，そのほとんどは近代において劣勢の（使用頻度がより低い）語が消失している。

３．２　使用頻度と語彙レベル

近代における使用頻度の多寡については，まず使用状況分類ごとに平均値を求めた。結

果を以下に示す。

表 3　使用状況と使用頻度

	AB 併存	B 消失	A 消失	AB 消失
語 A 平均	479.1	147.3	47.6	38.7
語 B 平均	88.5	22.3	22.0	16.9

さらに，田中（2011）の「語彙レベル」の枠組みを参考に，語のカバー率（累積使用率）により以下の通りレベル分類を行った[1]。

表 4　語彙レベルの分類基準値

レベル	カバー率	頻度範囲	調整頻度範囲
A	60%	1,125-358,407	150.51-47,951.51
B	80%	214-1,122	28.63-150.11
C	90%	60-213	8.03-28.50
D	95%	23-59	3.08-7.89
E	99%	4-22	0.54-2.94
F	100%	1-3	0.13-0.40

次に，レベル AB を高頻度，CD を中頻度，EF を低頻度として，対をなす語 A－語 B（両者の頻度は A＞B）の頻度組み合わせを「高－高」「高－中」「高－低」「中－中」「中－低」「低－低」の 6 分類とし，前節に示した使用変化の 4 分類とのクロス集計を行った。結果を表 5 に示す。

表 5　漢語対の頻度と使用状況変化との相関

	AB 併存	A 残 B 消	B 残 A 消	AB 消失	総計
高ー高	10				10
高ー中	55	9			64
高ー低	19	15			34
中ー中	65	29	11	5	110
中ー低	52	70	5	15	142
低ー低	6	12	7	10	35
総計	**207**	**135**	**23**	**30**	**395**

漢語対の頻度と使用状況変化との関係を見ると，AB どちらも近代において中高頻度の対は併存する語が多いが，近代で B が低頻度のペアは，B が淘汰される傾向が強い。

３.３　両語の意味的関係性

対となる語同士の意味的関係性については，田島(1998b)の枠組みに倣い表 6 に示す 4 分類とした。具体の漢語対を分類する際には，『日本国語大辞典　第 2 版』[2]の記述に基づき

[1] 分類手法の詳細は，間淵 2017a を参照のこと。
[2] 田島(1998b)では，現代語の中型辞典を語義分類の判定に用いており，第 1 義が現代語においてより基本的な語義であることを意図したものとするが，本研究では，近代における

判断した。なお，辞書に掲載のない語を含む場合は，意味関係を「不明」とした。
先に 3.1 節において示した使用変化と意味関係分類のクロス集計結果を表 7 に示す。

表 6　両語の意味関係分類

分類	意味関係	本研究における分類基準
I	ほぼ同義	意味記述に字順転倒語が用いられており，内容がほぼ重なるもの
II(1)	類義（重なり大）	両語の第 1 義において，Iの基準に当てはまるが，両語あるいはどちらかの語が第２義以下の異なる語義を持つもの
II(2)	類義（重なり小）	両語あるいはどちらかの語が第２義以下の異なる語義を持ち，第２義以下の語義において字順転倒語と同義関係にあるもの
III	異義	I，II(1)，II(2)に当てはまらないもの

表 7　意味関係と使用変化の相関

	AB 併存	B 消失	A 消失	AB 消失	総計
I	62(42%)	64(43%)	10(7%)	12(8%)	148(100%)
Ⅱ(1)	43(57%)	27(36%)	1(1%)	4(5%)	75(100%)
Ⅱ(2)	26(63%)	11(27%)	4(10%)		41(100%)
Ⅲ	74(60%)	31(25%)	8(7%)	10(8%)	123(100%)
不明	2(25%)	2(25%)		4(50%)	8(100%)
総計	207	135	23	30	395

類義・異義のものは対となる両語が現代でも併存する割合が高く，同義のものは劣勢の語 B が淘汰される割合が，他よりもやや高い。

分析対象とする 395 の字順転倒漢語対に関して，上記分類を適用した結果，Ｉ，Ⅱ(1)，Ⅱ(2)に分類された 264 対を表 7 に掲載する。なお，田島(1998b)に言及のある対（以下，「田島リスト」）の場合，その分類結果をそのまま利用することとし，これに含まれない対（以下「新規」）と別に示す。

同義性に着目したいため，原義から派生義の順に配置されている『日本国語大辞典　第 2 版』を用いることとした。

表 8　意味関係による漢語対の分類

分類	田島リスト		新規	
I 148 対	70 対	多数/数多,平和/和平,議論/論議,統一/一統,運命/命運,旅行/行旅,便利/利便,生存/存生,簡単/単簡,消費/費消,国内/内国,君主/主君,苦痛/痛苦,評論/論評,途中/中途,製作/作製,治療/療治,分配/配分,苦労/労苦,事変/変事,祖先/先祖,産物/物産,真正/正真,練習/習練,合併/併合,現出/出現,木材/材木,明言/言明,圧制/制圧,見識/識見,愛情/情愛,剰余/余剰,売淫/淫売,関連/連関,名声/声名,争闘/闘争,生死/死生,熱情/情熱,人才/才人,食糧/糧食,襲来/来襲,音声/声音,争論/論争,誕生/生誕,継承/承継,微細/細微,補填/填補,修学/学修,上奏/奏上,忠誠/誠忠,武勇/勇武,略奪/奪略,変転/転変,平衡/衡平,降下/下降,威武/武威,造営/営造,遊歴/歴遊,保留/留保,敵対/対敵,社寺/寺社,戦敗/敗戦,綱紀/紀綱,書信/信書,教示/示教,婢僕/僕婢,認容/容認,下垂/垂下,険峻/峻険,補修/修補	78 対	国民/民国,人民/民人,制限/限制,平生/生平,英仏/仏英,富豪/豪富,抵抗/抗抵,民衆/衆民,善良/良善,野蛮/蛮野,風習/習風,良好/好良,英米/米英,商工/工商,熟練/練熟,滅亡/亡滅,復興/興復,鋼鉄/鉄鋼,見聞/聞見,認識/識認,抑制/制抑,西南/南西,英独/独英,忍耐/耐忍,覚醒/醒覚,辛苦/苦辛,異同/同異,歩行/行歩,露仏/仏露,展開/開展,過大/大過,横暴/暴横,西北/北西,退隠/隠退,詩文/文詩,約定/定約,東南/南東,感興/興感,属僚/僚属,抑圧/圧抑,憂鬱/鬱憂,源泉/泉源,従順/順従,福利/利福,該当/当該,絶滅/滅絶,畏敬/敬畏,喜悦/悦喜,米独/独米,調整/整調,興隆/隆興,財貨/貨財,婚約/約婚,独仏/仏独,知了/了知,銃砲/砲銃,精励/励精,正邪/邪正,随伴/伴随,狂熱/熱狂,艦船/船艦,治平/平治,毛髪/髪毛,往古/古往,弱小/小弱,景勝/勝景,航通/通航,慈仁/仁慈,深甚/甚深,成育/育成,愛他/他愛,独露/露独,厭倦/倦厭,上座/座上,累積/積累,省減/減省,液汁/汁液,絶佳/佳絶
II (1) 75 対	30	感情/情感,習慣/慣習,往来/来往,始終/終始,大同/同大,回転/転回,趣旨/旨趣,結論/論結,光栄/栄光,奇怪/怪奇,実情/情実,接触/触接,時日/日時,趣意/意趣,退廃/廃退,礼拝/拝礼,天上/上天,夜半/半夜,弁論/論弁,途方/方途,隔離/離隔,威勢/勢威,情欲/欲情,図絵/絵図,親和/和親,由縁/縁由,離別/別離,氷結/結氷,協和/和協,心痛/痛心	45	政治/治政,社会/会社,国家/家国,事実/実事,範囲/囲範,決議/議決,少年/年少,古今/今古,証明/明証,産出/出産,権威/威権,階段/段階,一斉/斉一,性情/情性,詔勅/勅詔,舞踏/踏舞,海陸/陸海,文法/法文,衆人/人衆,女児/児女,山海/海山,着実/実着,水分/分水,慰安/安慰,土壌/壌土,知覚/覚知,勲功/功勲,線条/条線,与党/党与,富国/国富,上進/進上,水流/流水,説話/話説,年期/期年,胃腸/腸胃,東北/北東,英和/和英,差等/等差,上面/面上,花月/月花,動地/地動,容儀/儀容,深浅/浅深,霜雪/雪霜,煙火/火煙
II (2) 41 対	15	議会/会議,進行/行進,接近/近接,所在/在所,色彩/彩色,愛敬/敬愛,局部/部局,居住/住居,感触/触感,望遠/遠望,懐抱/抱懐,近親/親近,異変/変異,石碑/碑石,交情/情交	26	法律/律法,女子/子女,同一/一同,中心/心中,人士/士人,現実/実現,出発/発出,長官/官長,気風/風気,格別/別格,長所/所長,理事/事理,風流/流風,出世/世出,根性/性根,女工/工女,害毒/毒害,理法/法理,春陽/陽春,地平/平地,国中/中国,桂月/月桂,教法/法教,急性/性急,政法/法政,末端/端末

（備考）上記に含まないⅢ異義 123 対，不明 8 対の内訳は以下の通り。

Ⅲ(123 対)　外国/国外,文明/明文,権利/利権,主人/人主,科学/学科,大事/事大,発揮/揮発,議院/院議,内部/部内,本国/国本,作家/家作,馬車/車馬,年来/来年,人道/道人,理学/学理,理論/論理,空中/中空,関税/税関,製鉄/鉄製,動機/機動,国王/王国,室内/内室,上陸/陸上,制裁/裁制,軍国/国軍,祖父/父祖,支度/度支,実質/質実,牛乳/乳牛,部下/下部,気運/運気,生長/長生,客観/観客,名家/家名,同会/会同,数字/字数,女王/王女,義理/理義,人工/工人,女皇/皇女,席上/上席,国立/立国,質素/素質,理性/性理,年中/中年,法王/王法,素養/養素,人家/家人,下流/流下,名人/人名,事故/故事,著名/名著,人知/知人,

文人/人文,風光/光風,礼儀/儀礼,前面/面前,経常/常経,中隊/隊中,波長/長波,毒蛇/蛇毒,所要/要所,父君/君父,害虫/虫害,道中/中道,日中/中日,水上/上水,来朝/朝来,商会/会商,年末/末年,著大/大著,学政/政学,同党/党同,応対/対応,大老/老大,砲火/火砲,制服/服制,字音/音字,限定/定限,分権/権分,論定/定論,別種/種別,明月/月明,名山/山名,船客/客船,人前/前人,手工/工手,主教/教主,城外/外城,気鋭/鋭気,老中/中老,中腹/腹中,本院/院本,国君/君国,柱石/石柱,形象/象形,才学/学才,名文/文名,機転/転機,理非/非理,道士/士道,天則/則天,高座/座高,部面/面部,逸散/散逸,番茶/茶番,編中/中編,衆多/多衆,席次/次席,林学/学林,皇上/上皇,軍中/中軍,公主/主公,火熱/熱火,風通/通風,所好/好所,稿本/本稿,民生/生民,霊山/山霊,経蔵/蔵経,流俗/俗流,超出/出超,府城/城府

不明(8 対）　大国/国大,振作/作振,満天/天満,想美/美想,郡市/市郡,同公/公同,兵部/部兵,中小/小中

４．考察

４.１　意味関係と頻度・使用実態変化との関連性

本研究の意図は，近代における漢語語彙変化（主に漢語語彙の縮小，表記や語法の画一化）の方向性が，「言語運用の合理化」「語と意味の１対１対応」であることを補強する事例として，字順転倒漢語対の減少の実態を捉えることである。この方向性から見ると，意味の重なりの度合いが高い対では，どちらかの語形（多くは勢力の弱い語形）が淘汰され，そうでない対は併存することになるはずである。意味関係と，近代での頻度・現代での使用実態変化との間の関係性についてまとめれば，以下のようになる。

表 9　意味関係と頻度・使用実態変化における関係性

	理想的	想定外
Ⅰ	B 消失, AB 低頻度消失	AB 併存, A 中高頻度消失
Ⅱ(1)	AB 併存, AB 低頻度消失	A•B 中高頻度消失
Ⅱ(2)	AB 併存, AB 低頻度消失	A•B 中高頻度消失
Ⅲ	AB 併存, AB 低頻度消失	A•B 中高頻度消失

３章で見た調査結果からは，これに当てはまる理想的な組合せが多く見られるものの，実際には想定外の組合せも少なからず生じている。

そこで，ここではその要因を探るべく，近代・現代における個々の用例を分析し，用法の実態を確認してみたい。

まず，辞書的には意味の同一性が高いと思われる対にもかかわらず，現代においても併存している対について見てみよう。

４.２　衰退の過渡期にあると思われる漢語対

意味関係がⅠにもかかわらずＡ語Ｂ語の両語が併存している語には，近代でも使用頻度の差があり Ｂ 語が少なく，現代において更に使用頻度を減らして極めて低頻度でのみ用いられる語がある。「統一」「一統」，「苦痛」「痛苦」，「治療」「療治」「苦労」「労苦」「練習」「習練」などがこれに当たる。

「苦痛」「痛苦」を例に検討する。両語の使用状況を，近代については出版年による年次別，現代についてはレジスター別に集計すると以下のようになる。

表 10　「苦痛」「痛苦」の使用実態

	近代							現代		
	1875	1887	1895	1901	1909	1917	1925	書籍	雑誌	新聞
苦痛	1	45	83	79	127	109	90	204	11	12
痛苦		5	23	10	8	3	5	3		

「痛苦」は，1887 年から用例が見られ 1895 年にやや使用割合が多くなるが，近代においては，いずれの年においても優勢語形「苦痛」が圧倒的に高頻度である。また，現代では書籍に以下 3 例が見られるのみであり，文学的ジャンルかつ現代においては生年の早い著者による使用である。ここから，「苦痛」「痛苦」の字順転倒漢語対は，優勢語形「苦痛」にほぼ統一され，「痛苦」は今後，生年の早い著者による使用が見られなくなる段階で，淘汰されるものと思われ，衰退の過渡期であると位置づけることができる。

(1) 自分が打ちのめされる痛苦をあじわいながら学んでゆくことで成立します。
BCCWJ・PB19_00305,大江健三郎(1930 年代生)『鎖国してはならない』2001 年，9 文学
(2) 本物の指令体が、お互を痛苦と悦楽の階段の極点へ、一気に昇らせる。
BCCWJ・PB19_00316,田久保英夫(1920 年代生)『仮装』2001 年，9 文学
(3) 黒田自身の痛苦な反省にふまえて語りかけられていることを実感させられた。
BCCWJ・PB52_00283,吉川文夫(1930 年代生)『今のぼくは二十七歳』2005 年，2 歴史

なお, 近代では優勢であった A 語が現代では衰退し, B 語が優勢になっている「争闘」「闘争」,「熱情」「情熱」,「争論」「論争」,「社寺」「寺社」,「戦敗」「敗戦」,「成育」「育成」などの漢字対もあるが，これらも現代で劣勢の A 語が衰退する過渡期であり，いずれ B 語にほぼ集約されていくものと考えられる。

4.3　意味や用法に分化が見られる漢語対

同様に，意味関係が I にもかかわらず A 語 B 語の両語が併存している語には，現代で両語がいずれも勢力を保って用いられている漢語対も多く見られ,「国民」「民国」,「平和」「和平」,「議論」「論議」,「運命」「命運」,「便利」「利便」,「国内」「内国」,「評論」「論評」,「途中」「中途」,「製作」「作製」,「分配」「配分」,「木材」「材木」,「関連」「連関」,「継承」「承継」,「該当」「当該」などの語がこれに当たる。

「便利」と「利便」を例に検討する。近代においては，例 4，5 に見るように，ほぼ同様の意味で用いられている「便利」「利便」は，現代では，A 語「便利」がほぼ形容詞用法に固定化され用いられ，一方の B 語「利便」は「利便性」の形に固定化して用いられている。

(4) 次に鑛山、鐵道等に及ぼし頻りに其便利なるを主張すれども
CHJ・60M 太陽 1895_04044,『太陽』1895 年 4 号
(5) 其後各地に鐵道開通するに從つて、其利便なるを認識し、
CHJ・60M 太陽 1925_05067,『太陽』1925 年 5 号
(6) 新幹線ができて、所要時間も半分に短縮され、便利になったとは聞いていたが、
BCCWJ 出版・書籍・PB50_00035，高石きづた『マーガレットの花』2005 年
(7) 線路などの維持費が安い路面電車に転換し、利便性を上げて存続することを決めた。
BCCWJ 出版・新聞・PN5a_00007，朝日新聞 2005 年 2 月 4 日朝刊

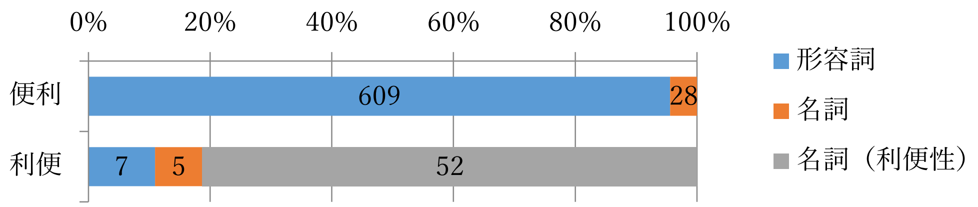

図２　「便利」「利便」の現代における用法分布

これらの語の多くは，近代においてほとんど差異がなく用いることができたものが，現代においては用法（連語，語法，意味，位相等）が分化することで，共に生き残った対のケースと捉えることができる。

５．まとめ

近代に特異に多く見られた字順転倒漢語対は，現代では半分程度が併存状態を保っているが，残りは淘汰されていることが分かった。対となる漢語が併存するか，どちらか一方を残し他方が淘汰されるかは，両語の意味的関係性による部分が大きく，類義関係または異義の関係にある対では 60%程度で併存状態が保たれているものの，同義関係にある対は 40%程度が併存し，40%は一方が淘汰されていた。

これまで発表者が研究を行ってきた，漢語の語彙や表記・語法における近現代間の通時的変化の方向性は，概ね「１義１語」を志向した漢語語彙の淘汰収束であると見られたが，同義関係にある別語形の併存が 40%程度見られる点は，これに反するように思われる。しかし，個々の語の使用実態を見ると，現代語で同義異形語が存在しているように見えるものも，淘汰収束の過渡期として残る両語併存，あるいは，用法の分化による類義・異義異形語であることを示唆することができた。

今回個々の語の変遷を取り上げることができなかった，同義（あるいは類義・異義）の漢語対が淘汰される過程についても，今後明らかにし，これまで発表者が明らかにしてきた異表記の淘汰や語法の画一化の時期と，字順転倒漢語対の淘汰の時期との関連についても，更に研究を進めたい。

謝　辞

本研究は国立国語研究所のプロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」による成果の一部である。

文　献

浅野敏彦(1997)『国語史のなかの漢語』和泉書院
荒川清秀(1997)『近代日中学術用語の形成と伝播: 地理学用語を中心に』白帝社
池上禎造(1984)『漢語研究の構想』岩波書店
今野真二(2012)『百年前の日本語―書きことばが揺れた時代 (岩波新書)』岩波書店
鈴木丹士郎(1979)「二字漢語の字序について」押見虎三二教授御退官記念事業会編『国語表現論叢（押見虎三二教授御退官記念論集)』明治図書出版，pp.239-245
鈴木丹士郎(1981)「「抵抗」と「抗抵」」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　二』和泉

書院，pp.237-254
鈴木丹士郎(1986)「二字漢語の字順についての問題」『国語論究１　語彙の研究』明治書院，pp.278-300
高野繁男(2004)『近代漢語の研究: 日本語の造語法・訳語法』明治書院
田島優(1998a)『近代漢字表記語の研究』和泉書院
田島優(1998b)「字順の相反する二字漢語」『近代漢字表記語の研究』和泉書院，pp.316-339
田島優(1998c)「『新説　八十日間世界一周』における字順の相反する二字漢語」『近代漢字表記語の研究』和泉書院，pp.340-374
田中牧郎 (2016) 「第 8 章　語種」斎藤倫明編『日本語語彙論 I （講座　言語研究の革新と継承１）』ひつじ書房，pp.241-274
間淵洋子(2016a)「近現代漢語におけるサ変動詞用法の変化: 形態論情報付きコーパスを用いて」『国際日本学研究論集』4，pp.17-35
間淵洋子(2016b)「近代二字漢語における同語異表記の実態と変化: 形態論情報付きコーパスを用いて」『計量国語学』30(6) ，pp.257-274
間淵洋子(2017a)「近代雑誌コーパスにおける漢語語彙の特徴: BCCWJ との比較から」『国立国語研究所論集』13，pp.143-166
間淵洋子(2017b)「近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化: 形容詞用法を中心に」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』2，pp.93-106
間淵洋子(2018)『近代漢語における表記・語法の多様性とその変化に関する計量的研究: 現代語確立期にみる言語変化の様相と背景』明治大学大学院国際日本学研究科 2017 年度学位請求論文
吉川明日香(2005)「字順の相反する二字漢語: 「掠奪―奪掠」「現出―出現」について」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究: 『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社，pp.143-155

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』　https://chunagon.ninjal.ac.jp/
（CHJ : 中納言 2.4.2 データバージョン 2018.03, BCCWJ : 中納言 2.4 データバージョン 1.1）